

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

創刊号

発行日
2023.4. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○これからは、「自分史」として書いていこう！

早いもので、令和5年も、既に、4月半ばとなっている。昨年は、70歳ということ、古希に絡ませ、自らのこれまでを振り返り、次なるこれから(いつまで続くかわからないが?)を展望すべく、こだわりの一年を送ったわけであるが、これを受けて、ここに、自称文筆家として(これしかない)、新たな形を模索することとした。それが、この、「岳陽」と共に」と題する書き物の発刊である。だが、これは、言うなれば、私自身の「自分史」の性格をもつものであり、読者には、その旨了解を賜り、寛大な眼差しを向けて頂くものである。要は、あくまでも自分のための書き物であり、自分の生き様、来し方を振り返っていくことを主眼とするものであるということである。

ちなみに、タイトルにある「岳陽」という言葉は、単なる「峻険な二岳の間から上り出する太陽」を指しているのではない。もちろんそこには、その情景に託した、私自身の密かな想いが込められていることは事実ではあるが、そこには、もう一つ、今となつては、誠に摩訶不思議な物語が秘められているのである！

ただし、その物語については、裏面担当の、もう一人の私?、堂本彰夫氏に語ってもらうことにしたい。彼が、どのように、その物語を行うのかは、私自身はあずかり知らないが、何故、私が、そのように表現したのかの理由は、そこで明かされるとのことである!!

末尾に、明後日(17日)、私(達?)は、「古希」から飛翔?する。どんな飛翔となるのか?容貌は仕方ないが、みっともない生き様だけは見せたくないものである!

○「古希を迎える粋な仲間達」が後押しを!

ところで、私の、このような新たな飛翔?をどのように思ってくれるのかは、全くの未知数であるが、ひよんなことから、この一年、メールやズームでの交流を行った、高校時代の仲間(9人の「古希を迎える粋な仲間達」との関係は、やはり抑えておかなければならない。

というのも、おそらくこの仲間達との出会い(再会?)がなかったら、私の「古希」を彩る想いも、体験も、決してなかったということであるが、その彼らとの交流が、私の「古希」の記念(思い出づくり?)を後押ししてくれたことは間違いないということである!そして、これがなかったなら、過日終了した「同期会(同窓会)」もおそらく実現しなかったであろう!!

なお、その、一年間続けてきたメール交流(随時やズーム交流(原則月1回)の足跡は、「唐津東高第15期生ニミニ交流誌(ききき通信)(通巻29号)」という形で収めてきたが、これは、私にとつては、予期せぬ財産(奇跡?)となることは言うまでもない(冊子にして共有してもいい!ズームの方は、動画にして、すべて保存している!)

そう言えば、かの「同期会」で、52年ぶりの告白?を受けた。穏やかな二次会の席上であったが、当時、名門?我が東高の不祥事(体育祭打ち上げ飲酒事件)相当数が1週間の謹慎処分!実は私も、連座していた!)の時に、私(井上)に勧めたのは自分(K君)で、そのことが、ずーと喉元の小骨のように刺さっていたという!

何という告白?であろうか?これもまた、この出会い(再会?)から生まれた不思議な縁(奇跡?)である!!

○「同期会(同窓会)」は、決して「ある」ものではない!

そこで、改めて、先月末(27日)に、「古希」にかこつけた高校の同期会(県立唐津東高校第十五期生)が、地元唐津(シーサイドホテル)であった。総勢七十余名の参加であったが、五十二年ぶりの再会となった人も、数多くいた。名乗りあわなくても、すぐに分かる人もいたが、どうみても誰だか分からない人も、少なからずいた(特に女性)。八クラスの内の一クラス分の人(四五人)が、既に物故者となっていたが、今後は、これに拍車がかかることは言うまでもない!!

とにかく、これからは、一人ひとりが、自らの生を全うすべく、残された日々を、身体の衰え・機能低下に喘ぎながらも、それぞれの地で、いかに自分らしく過(こ)していかかが問われる。「古希」は、さしずめ、そのための最終出発点(覚悟の年)ということになるわけである!!したがって、この同期会に集まった面々は、おそらくそのことを自覚し、そのための時間(ふんぎり?)として、かの故郷の地を訪ねたものと思われる!!ただし、当地に住む面々については、この限りではない!!

いずれにしても、それは、言うなれば、最後の望郷であり、極論すれば、それとの決別(卒郷?)の機会でもあったろう!!「もう、こうした形で、この地を訪れることはない!」、そういう思いであったらうということであるが、少なくとも、私のような、長らく故郷を離れて、他の地で生きている人間にとつては、これが最後の機会となるということである!!

なお、今回の「同期会」(もう一つの、大掛かりな組織(本部/支部)の名の下に行われる「同窓会」のような会ではない!)への参加に当たって、つくづく思ったのは、そうした会は、「ある」ものではなく、誰かが、確かな想いと責任でもって、「やる」ものであるということである。それがないと、決して実現しない!年月を経ると、さらに!ただただ世話人に、感謝である!

ということ、これまで組織的な会(同窓会)に縁がなかった私には、このような会(同期会)の有難さが身に染みて分かった!この年になってからの大きな収穫であるが(かなり遅い?)、是非とも、このことは、ここに書き記しておきたい!(井上)

○改めて、「岳陽」の由来とは？

さて、表面の井上氏に替わって、この裏面は、私「堂本」が担当することになるが、まずは、誌名にある「岳陽」の、もう一つの由来を記すことから始めたい。

もうはるか前のことであるが（四十歳頃）、福岡県篠栗町にある県立社会教育総合センターで、毎年5月の第3土日に開かれていた（今も開かれている）、ある実践研究交流会の懇親会の二次会で出会った、佐賀県から来られていたKさんという女性（今は消息不明？）に、私の守護霊（背後霊）を見てもらうという「僥倖？」があった。

その時に知らされたのが、実は、左の絵の人物である。他にも何人かは見えるが、その主たる霊は彼で、彼は、中国唐代の王族（青年貴公子？）で、あまりにも高潔で自分で言うのも気恥ずかしいが、確かそういう物言いであったように記憶している！ある意味世間知らず？、それ故に、他の王族達からは疎んじられていたという。まるで、私のその後を暗示していた（詳しくは書けないが！）その彼を描き（説明文もあった？）、私に送り届けていてくれたのである（何とそこには、岳陽舎の字も！）。



当時の私は、今よりは、かなりふつくらとしていたので、彼との親近感はあまりなかったが、最近の私の顔貌は、それに近づいている

ようにも見える（だから、その字を使いたい？）!!

とにかくKさんには、その後の私の姿が見えていた!! 驚愕と言えば、あまりにも驚愕である!

※参考までに、中国湖南省岳陽市（洞庭湖の近く）には、「岳陽楼」という楼閣があり、唐代の文人達が集つていたらしい。彼女は、そのことを知っていたのであろう!!

〈短歌に託して〜これからも、これは必須である!〉

・「岳陽」に導かれつつ 我は今
想いも新たに 「古希」を越ゆ

・桜舞う ふるさと歩く 古希の連れ連れ（徒然）
行く先々に 思い出あり

・五十二年の歲月 いかにもありしか
若き日の かの告白のネタ たただだ驚き

・改めて 「岳陽」に託す 我が思い
そこに込められし 怪しげな縁

・よくぞ こんなことまで 調べ上げ
ただしそれらが 我を惑わす

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕①

○「老松おいま」に隠された北部九州の秘密

やはり最後は、古代史探訪である！私堂本にとつては、それは、単なる歴史好きということではなく、自国の成り立ち時の不明さ（嘘？）とその原因、そして、改めての真実を、自分（達）なりに知っておきたい！それが、この国に生を受けた一人の人間（国民）としての責務なのではないか（嘘？）をつかれているのが悔しいとも？言い過ぎか？、そう思うからである！

だが、そうは言っても、所詮素人、そんな大それた所業など、土台無理な話である！専門の研究者はともかく、長い年月と労力をかけて、必死に追いかけてきた先人達に申し訳ない（ネット上には、そうした人達が山ほどいる！）！そんなことを思いながらの、我が古代史の旅でもあるわけであるが、とは言え、少しは見えてきたものもある!!

あるいは、これまでの多くの知見の整合性の道筋みたいなものも、いくつか見えてきたようにも思う（要は、有無な情報や研究成果が多々あるにも拘わらず、それらは、一つにはまとまらず、同じ国の歴史なのに、誠に奇妙な状態（バラバラ？）となっている！）!!

ということでは、ここでは、「堂本彰夫の古代史旅枕」と題して、その当たりのことを、改めて記していこうと思うが、今回は、先年同期会に際して訪れた（それが、「旅枕」ということでもある）、福岡県朝倉市の「下洲しもすま老松神社」をネタに、「老松」に隠された北部九州の秘密？について触れておきたい。

まず（これは、ネット情報からであるが）、この下洲老松神社は、「秋月への入口点の甘木待丸・三輪内村と秋月街の中間に当たり、楠の太木が繁る境内の広い神社」であるが、福岡県神社誌によれば、祭神は「神功皇后」と「菅原神、吉祥女」とされているということである。しかし、社殿には「梅鉢紋」（菅原神）を表す（が打たれてはいるが、実際は、「菅原神、吉祥女」は祀られていないし、神功皇后も、本殿後ろの撰社群の中の「忌宮いみのみや」神社）に関連はあるが、本殿には祀られていない！したがって、実際の神社祭神が異なっているというのである!!

もちろん、この異変？については、どういうことか、私にはよく分からないのであるが、この「老松神社」は、通常（表面的には、菅原道真とその親族を祀るとされているが、実は「開化天皇（第9代）」（あるいは「大國主命」）を隠し祀る神社なのではないか（天満／天神神＝菅原神の名の下、開化天皇が消されている？隠されている？）!!そういうことが言われているのである!!福岡県内には、そのような老松神社が11社（実際は64社あるらしいが、そこには、大変な秘密が隠されている!!ならば、どんな秘密が？そして、そうであれば、何故そうなっているかなのである!!

〈編集後記〉事情により、発刊日を二日程早めましたが、とにかくここに、思い出深き『きき通信』後の形をなすことが出来ました！おそらく、これが、私（達？）の、最後の通信（パソコンを使って文章を作成し、それをネットにあげる）と）となるかもしれませんが、みなさんの、心からの「笑談」を期待しています。改めて、よろしく!!

（井上ノ堂本）